

## 原稿用紙三枚の脚本

フジTVの開局当時、私は芸能部のドラマ班に居た。机を並べて居た五社英雄、森川時久、岡田太郎らと共に、産れて間もないテレビと云うヤンチャ坊主に振り廻されながら、NTVやTBSの先輩ディレクター達に何とか追いつこうと必死だった。ただ、自分の演劇が好きで、フジの前のニッポン放送時代には、小劇団の芝居を何本か書いた事も有った。節を曲げてテレビ局に居た理由は一つ。「芝居では食えない」からである。

× × ×  
開局して三、四年経った頃、三十分の連ドラをやれと云われた。四人組の何でも屋（今の便利屋）の喜劇で、出演俳優は三井弘次、桂小金治、守屋浩、市川和子等。音楽は未だ無名に近かつたはずみ・たくを起用。タイトルは「ぼうふら紳士」と決まり、脚本を当時は売れっ子の岡田教和と津瀬宏の二人に頼んだのだが、これが間

## 松木ひろし

違いの始まり……。

岡田（故人）は菊田一夫先生の直弟子で、かなりのイケ面遊び人。（ロミ山田との結婚披露宴では、アトラクで黒人ストリップパーを全裸で踊らせ、我々参列者を嘩然とさせた）そして、仕事は師匠譲りの運筆。津瀬の方は飲んべ、（何年か後死んだが、それも酔ってバアの階段から落ちた為）の上、左手で書く（右は手首から先が無かつた）のでこれも執筆は超スロー。ドラマは何とかスタートしたが、不吉な予感も消し去れなかつた。

× × ×  
当時のドラマは勿論ナマ放送。（因みにビデオテープは一本百万円で、オイソレとは使わせて貰えなかつた）オン・エア前日は本読み、立稽古。本番当日は昼頃スタジオに集まり、建て込まれた幾つかのセットを移動しながらリハーサル。最後にノン・ストップのカメラリハを通し終えてタバコに火をつけると、もうオン・エア

開始の七時の直前——。スタート後、台辞や段取りでトチって時間が延びると、エンディング無しの尻切れトンボで終わったり、逆に早く過ぎて自身の画面が何十秒も続いたり——は日常茶飯。何や彼やでやっとスリリングな三十分が終ると、体重が三キロも減った。何回目かを放送し終わった頃、早くも不安は適中した。次のオン・エアが近づいても、一向に脚本が届かない。前日の昼、夕方になっても——だ。夜になると、スタッフもパニックって苦情が殺到した。

「どんな衣裳用意します？」  
「セット、間に合わねえよ、もう。」

その時、教和のマネージャーが紙袋を持って入って来た。所が、袋の中身はシーン①だけ。原稿用紙でたった三枚……!? 衝撃と怒りを抑えて電話すると、

「ゴメンな。オレ、病気でさ。脳ミソにスが入っちゃって、台辞が思い浮かばないんだ。」

「ナ事云われても困るよ。明日の放送どうすんの？」  
「代り探してよ。次はオレ、ガンバる。」

仕方なくツンベ（津瀬）を探すが、相変らず飲みに出て行方不明。この俣では、フジ初めての「放送に穴を開けたディレクター」として、歴史に名を残してしまふ。それだけは嫌だ。とすれば、此処は究極の奥の手を使うしか無い。本を自分が代筆するのだ……!

その夜、東の空が白む頃まで掛けてやっと書き上げた原稿を渡すと、それからはスタッフ全員がコマ落しの映画みたいに猛スピードで動き廻り、昼の稽古の開始時刻までに略々準備を完了させてしまったのである。ミラクルとしか云い様がなかつた。

然し、ホツとしたのも束の間で、ハプニングはまだ続いた。脚本

を待つて一晩中飲み続けて居た主演の三井さんが、ベロベロの宿酔で舌がもつれ、台辞がぜんぜん聞きとれないではないか……!? 慌てて彼の台辞を凡て小金治師匠に振り替え、三井さんは、「ああ。」  
「そう。」  
「その通り。」なんて合槌を打つてるだけで本番終了。ムチャクチャだが、それでもドラマとして通ってしまうのだから、今考えると何とも不思議な「良き時代」だった。

脚本岡田教和——で放送したから、ギャラ（三万円）は勞せずして彼の懐へ。（流石に断るかと思つたが、ノリカズは大喜びだった）当時、フジTVの給料も三万円だったから、フと気がついた。一ト月に一日、三十分ドラマ一本書くだけで月給分が稼げるなら、こんな好い商売は無い。そこで早速退職届を部長に提出し、その次の週には、番組スポンサー（ロート製薬）の御指名で、「ぼうふら紳士」の脚本を、厚かましくも堂々と自分の名前で書いて居たのである……。

× × ×  
あれから四十余年——。

自作、他作を問わず、色々な意味で記憶に残るシナリオは決して少くない。然し、どんな感動的な傑作よりも、昔、紙袋で受け取つたあのたった三枚の脚本が、それからの我が人生の大きなターニング・ポイントになったのを忘れる事は出来ないだろう。

\* 「ぼうふら紳士」1960年（昭和35年）フジテレビにて放送。